

四、『患者革命』うらばなし

西原 克成

あいことば

体に血の巡らない臓器別医学、治る西洋医学の復活、血の巡る医学の復活、
医者の中の医者 (Arzt von Ärzten wie König von Königen; King of Kings: キリスト
の事)、西原流口腔科医

キーワード

医学者に壊された西洋医療＝罰当たり医療、罰当たり国策育児法、罰当たりの
習癖、口呼吸、冷中毒、骨休め不足

今の世界中の西洋医学者と自己非自己の免疫学者は、御託ばかり並べて全く治
せない医療を振り回して悦に入っています。本講演では罰当たりとは何か？宗
教とは何か？ヒトの道とは何か？発展の進化、絶滅に向かう進化をお示しま
す。

今日の免疫学にも進化論にも、これらの現象を取り仕切っている「目には見え
ないエネルギー」の働きに関する理解が完璧に欠落していますから、それでい
くら治療しても治せないし、進化学も究明出来ないのです。

暑さ寒さの環境エネルギーや体の使い方の生体力学エネルギー、全く目にも体
感にもわからない重力エネルギーと、生命力の源であり基本単位でもある、
糸粒体のエネルギー代謝を医学に導入して完成した西原流の「治る西洋医学」
が今やすでに完璧に復活しているのです。

今の医療は、40年前に奸智抜群の心の悪い医学の権威者によって故意に壊され
たものなのです。それ迄の治る医療から、治さないでもよい医療へとポイント
切り替えされたのが、医学部に端を発した大学紛争・医学部紛争が収まった昭
和45年1970年です。皆さん！思い出して下さい。その頃には今難病とされて
いる殆どの病気がペニシリン等の抗生剤やサルファ剤でいともたやすく治って
いた時代だったのです。西原流医学は、当時の治る医療をしつこく覚えていた
からこそ、本当にいとも簡単にこれをリバイバルさせることが出来たのです。

この度は細胞生物学に代るミトコンドリア生物学に基づいて超多細胞動物の
統一個体制御のしくみを余すところなく究明するとともに難治性疾患の本態を
究め治療法を見つけ出すためにニューロン糸粒体共鳴診断法を確立しました。
これにより、ミトコンドリアとエネルギーを無視した現代医学・生命科学を乗
り越え西原流の治る医学を身につけましょう。

拙者の臨床例は一読すれば瞭然ですからここでは主としてうらばなしをと、ま
るで「床屋医者パレ」の再来の如く誰も思いつかない口腔科や免疫病の治験症
例を示します。

この朔太郎も『こころ』と題して、

こころを何にたとえん
こころは紫陽花あじさいの花
うす紫に咲く日はあれど
うす水色の思い出ばかりがせんなくて

とこころがうつろいやすいことを紫陽花の変化する色にたとえて歌っている。こころが何によってうつろうのかと言えば、腸管の有り様によって変化するのだから意外である。

こころはミトコンドリアが産生する体温と同じ質量のないエネルギーであり、紫陽花の色もまた光のエネルギーである。このこころが腸管内臓系をつくる40兆個の細胞内に生きている糸粒体と、これらと共役して働く2兆個の脳神経細胞の中でせっせせっせとまるで国家における一人一人のヒトのごとくに協同して働く糸粒体に依存しているのです。